## ３４　家族の電話番号すぐに答えられますか

　ご多分にもれず、新年のはじめに「年賀状じまい」をお伝えしました。還暦でひと区切りというのが理由ですが、年賀はがきの発行枚数は２００３年のピーク時約４４億6000万枚に比べると４分の１になったそうです。１２月１５日の毎日新聞の「余録」には、年賀状の現状が「はがき文化」退潮の象徴と書かれていました。郵便物の消印がミステリーのトリックに使われることがありますが、ここでは「アフリカの夢」（柳ジョージ＆レイニーウッド。１９８０年）という歌を紹介します。「南廻りの船でアフリカに行くのが夢」のうらぶれた男は、酔うと誰かれ構わず一緒に行こうと誘うのですが、ある日町からいなくなります。しばらくしてアフリカに着いたとはがきが届くのですが、それには隣町の消印が押されてあり、男も海に落ちて死んでしまったという噂が流れます。曲の最後はそういう男を馬鹿にするでも哀れむでもなく、「俺達より奴のほうが幸せのずっと近くに生きたような気がする」と歌いあげます。メールではこうした「物語」が成立しなくなるわけです。「電話」にしたって、「ダイヤルを回す」が死語なので、ヒッチコック氏の「ダイヤルMを廻せ！」（１９５４年公開）なんて、意味不明のタイトルになるのも間近です。スマホが何でも記憶しているので家族の電話番号もハナから覚える気なんてありませんから、内田裕也氏の歌った別離のバラード（「テレフォンナンバー」１９８５年）の歌詞「アドレス帳のこの一行は黒く消したけれど　私の頭の中の消せはしない　このテレフォンナンバー」もパラレルワールドでの話になってしまっています。ちなみに、原田芳雄主演の「やさぐれ刑事」（１９７６年公開）で、行方をくらました主人公が敵のヤクザに電話して、「てめぇ、どこにいやがるんだ？」と聞かれ、「電話の前に決まってるだろ」ってからかって答えたのも、固定電話の時代だから面白いわけですね。

　さて、私は文化の断続を危惧していますが、テクノロジーの全てを否定するつもりはありません。ただ、子どもたちには便利なものや合理的なものが全て正しいわけではないことと、古いものでも良いものは良いということを伝えていく必要があると考えます。確かにスマートフォンやＳＮＳの利便性は否定できません。しかし、記憶も検索も作文もＡＩに丸投げのアウトソーイングが可能になった今、私たちの思考や生活はホントウに豊かになったのかと思うわけです。山本夏彦氏は「茶の間の正義」（１９６７年発刊）の中で、テレビやラジオのない時代が今より不幸だったかと疑問を投げかけた後に、「順ぐりにさかのぼれば、ガス水道電気にいたる。電気は行燈（あんどん）の十倍明るく便利だとすれば、日清日露の昔より今は十倍幸福か」と書いた。極論になってしまったので話を戻しますが、二つのことを書いてそのまま終わりにします。一つ目は福沢諭吉の「西洋事情」についてです。これは慶応二年に発刊された、先進文明を紹介した書物で、当時２０万部から２５万部売れたと言われています。今なら「ベストセラー本」と言えますが、慶応二年は新撰組が尊皇攘夷の志士を斬っていた頃ですから、実は江戸時代の人々が現代人よりはるかに好奇心にあふれていたことを教えてくれます。もう一つは宮崎駿監督の言葉（２０２４年9月１４日朝日新聞）です。テレビのディレクターから「（鉛筆書きから）デジタルに移らないんですか、便利ですよ」と言われ、「便利が尊いと思う人間はそれにすがればいいんです」と即答したとのこと。それでは今年もよろしくお願いいたします。

令和７年１月６日　大村城南高等学校長　中小路尚也